

A Japanese Translation of Susan Graspell's Trifles

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1995-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山名, 章二(訳) メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4256

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



スーザン・グラスベル作

「つまらぬこと」

山 名 章 二 訳

人 物

ジョージ・ヘンダスン、郡検事

ヘンリー・ピーターズ、保安官

ルイス・ヘイル、隣の農夫

ピーターズ夫人

ヘイル夫人

場 面

人気のない農夫ジョン・ライトの家の台所。陰鬱で、散らかしたままの台所である——汚れた鍋がいくつか流しの下にあり、パンが一塊パンケースに入れないままで置かれ、食卓の上に布巾が一枚——他にも途中で放り出した仕事ぶりがあちこちに見られる。舞台奥の表に通じる戸が開き、保安官が入って来る。郡検事とヘイルが後に続く。保安官とヘイルは中年、郡検事は青年である。誰も着膨れしていて、急いでストーブに近づく。女性が二人後に続く。最初に保安官夫人——華奢な女性で、ほっそりした神経質そうな顔つきである。ヘイル夫人の方が大柄で、普段ならば、くつろいだ表情をしていると言えるところだが、今は心乱れ、あちこちおそろしげに見やりながら登場する。女性陣はゆっくりとした足取りで入り、戸口に近く身を寄せ合って立っている。

郡検事 〈揉み手をしながら〉 人心地がつく。皆さんも火に当たりなさい。

ピ夫人 〈一步前に進み〉 寒くは——ないですわ。

保安官 〈用件にかかる合図にするかのようにオーバーのボタンを外し、ストーヴから遠ざかりながら〉 さて、ヘイルさん検証を始める前に、昨日の朝来られたときに見たことをヘンダスンさんに説明してもらいましょうか。

郡検事 ところで、何か動かししましたかな。それとも昨日のままですか。

保安官 〈周りを見回して〉 ままですな。ゆうべ零下になったとき、朝にはフランクをよこして火を起こさなくちゃならんと思ったんですよ——こんなヤマがあつて肺炎にかかったんじゃあらちがあきません——それにフランクはああいう奴ですからな。

郡検事 誰かここにいささせるべきだった。

保安官 ああ——昨日ね。気のふれたあの男を引き取りにフランクをモリス・センターに行かせたんで——昨日は手一杯だったことを判ってもらいたいですな。今日にはオマハから戻られることは知ってたが、何から何まで一人で目を配るんじゃあ——

郡検事 ところでヘイルさん、昨日の朝ここへ来たときの様子どうだったんです。

ヘイル ハリーと一緒にじゃが芋を積んで町へ向かったんだよ。家から街道沿いに来て、ここへさしかかったころ言ったんだ、「ジョン・ライトが電話の共同加入に一枚乗るか聞いてこよう」とね。前にも話すには話したんだが、はぐらかされてな——今日日どいつもおしゃべりが過ぎる、静かでありさえすりゃあ文句は言わねえ、つてのがやつの言い分さ——知ってのとおり、とんだおしゃべりのくせによ。それでもやつの家に出かけて、かみさんの前で持ちだしやあ——もっともハリーにやあかみさんの意向でジョンの考えが変わるとも思わねえって言ったんだがね——

郡検事 その話はまたのことにしましょう、ヘイルさん。ぜひまた話すとて、今は、この家にこられたときに何があったかに絞ってください。

ヘイル なんにも見も聞きもしなかった。ドアをノックしたんだが、もの音ひとつしねえんだ。起きているにちげえねえとは判ってた、8時を過ぎていたしな。それでまたノックすると、誰か「入れ」っていったのが聞こえたような気がしたんだよ。気がしただけだ、今でもな。だけど戸を開けたんだ——この戸だよ 〈と女二人が傍らに立っている戸口を指しながら〉 そしたらあそこの揺り椅子にな—— 〈指さしながら〉 ライトのかみさんが座っていたんだ。

〈一同揺り椅子を見やる〉

郡検事 なにを——してたんです。

ヘイル 椅子を揺らせてたな。前掛けを手にもって、なんかこう——折り目でもつけてるようだった。

郡検事 それで、どんな——顔つきで。

ヘイル そうよなあ、妙な顔をした。

郡検事 妙な、ってどんな。

ヘイル そうよな、どうしたらいいか判らねえって風だったな。それに、どこか参ってたな。

郡検事 人に入ってこられてどう感じてる風だった？

ヘイル そりゃ、気にした様子はなかったな——全然。ろくに気が付いてもいなかった。「どうかねライトのかみさん、寒いねえ」って声をかけると、「そうかい？」って言ったきりで——前掛けに折り目えつけるのをよさねえんだ。まあ、おどろいたな。ストーブにあたれともすわれとも言わねえで、すわってるだけ、俺に目え向けるでもねえ。で、俺が言ったんだよ、「ジョンはいるかい」ってな。するとよ、かみさん笑うんだ——声え立ててよ。ありゃあ笑ったんだろうなあ。表にハリーと馬あ待たしてたし、すこしきつく言ったんだ「ジョンに話があるんだ」って。たら、のみこみが悪げに「駄目だ」って言うんだよ。「いるんだろ」って俺。「ああ、いるよ」ってかみさん。「だったらなぜ話が駄目なんだ」って聞いたんだよ、いらいらしてな。たら、「死んじまったから」だとよ。「死んだあ？」と俺。相手あうなづくだけよ、ちよっとも慌てねえし、椅子を揺すってな。「なら——どこにいるんだ」と俺。他に言うこともねえし。上を指さすだけ、こうね〈階上の部屋を指さしながら〉。俺は立ち上がったね、上へ行く気でよ。で、そこからここまで歩いたんだ——それから、言ったんだ「何で死んだんだ」。「首に縄巻いて死んだんだよ」って言って、前掛けの折り目つけてるふりだ。それで、俺あ外へ出てハリーを呼んだんだ。助けが要りそうだったんでな。で、上に行ってみたら、奴さん寝ててね——

郡検事 そのあたりは二階に行ってからにしよう、あれこれははっきりしてもらえるし。ここでは他のことを続けてください。

ヘイル そうよなあ、はじめに縄を外そうと思ったよ。見たところ——〈言いよどむ。顔が引きつる〉——でもハリーが近づいて「いや、確かに死んでる、なんにも触っちゃなんねえ」って言うんだ。それで階段を下りたんだよ。かみさんはおんなじ風に座ったまんま。俺が聞いたね「誰かに連絡したかね」。「いいや」と我関せずの答え。「ライトのかみさん、これは誰の仕業かね」とハリーが言った。ごく普通の口調でな——そしたら、前掛けに折

り目えつけるのをやめたんだ。「知らないよ」と言う。「知らねえ？」とハリー。「そう」とかみさん。「一緒に寝てたんだろう」とハリー。「そうだよ、だけど私は壁側にいたから」とかみさん。「じゃ、だれかが首に綱を回して締め殺したんだが、あんたは起きなかった、っていうわけかい」とハリーが聞いたんだ。すると、「起きなかったんだよ」と言うんだ。のみこめねえって顔をしてたんだろうなあ、なぜって、すぐに言ったんだ「わたしや眠りが深いんだよ」ってな。ハリーはもっといろいろ聞くつもりだったが、初めに検死官が保安官に言ってもらう方がいい、って俺が言ったんで、ハリーがリヴァーズンところへ大急ぎで行ったんだ、電話があるからよ。

郡検事 検死官を呼びにやったと知ってライト夫人はどうかしたかね？

ヘイル あの椅子からこっちのこの椅子に移ったんだ。〈隅の小さな椅子を指さしながら〉それから手を組んで下を向いてじーっと座ってたな。なんか話しなくちゃあなんねえ気がしてよ、ジョンが電話あひく気があるか聞きに寄ったんだって言ったんだ、するとかみさん笑いだして、それから笑いやむと俺を見たんだよ——おびえた様子でな。〈郡検事は取り出していた手帳にメモを書く〉どうだかなあ、おびえてたんじゃあねえかもな。どうもちがうようだな。じきにハリーが戻ってきてよ、ついで、ロイド先生と、ピーターズさん、あんたが来てくれたんだ。まあ、俺が知っててあんたが知らねえこたあこんなところかな。

郡検事 〈周りを見やって〉まず二階に行って、それから納屋や納屋のあたりに移ろうか。〈保安官に〉ここには何も重要な手がかりはみつからなかった——動機につながるものは、と言うのは確かだね。

保安官 台所用具の他にはなんにもありませんな。

〈郡検事は、もう一度台所を見回してから、食器棚の扉を開く。椅子の上に乗り、棚を調べる。手を引っ込める、べとべとである。〉

郡検事 大した散らかりようだ。

〈女達は一層身を寄せあう〉

ピ夫人 〈もう一人の女性に向かって〉まあ、果物だわ、凍ったのね。〈法律家に向かって〉とても寒くなったころ気を揉んでましたわ。火が消えると広口瓶が割れるっていったわ。

保安官 これだから女にはかなわねえ！ 殺人の容疑をかけられてるっていうのにジャムの心配だ。

郡検事 調べが進めばもっと大事なことに気を揉むことになるうさ。

ヘイル まあ、女どもはつまらねえことに気を揉むもんだ。

〈二人の女性はさらに身を寄せ合う〉

郡検事 〈若い政治家らしい優しさを見せて〉 しかし、あれこれ気を揉むにしても、女性がいなくては どうしたらよいものやら。〈二人の女性は懐柔されない。彼は流しのところへ行き、バケツから柄杓一杯の水を汲むと、洗面器に注ぎ、手を洗う。回転式のタオルで手を拭きはじめるが、汚れの少ない部分はないかと回転させる。〉 どれもこれも汚れっぱなしだ！ 〈足で流しの下の鍋を蹴る〉 あまり始末がお上手ではないようすな、ご婦人方。

ヘ夫人 〈ムツとして〉 農場には仕事が多いんですよ。

郡検事 ごもつとも。ですが 〈彼女に軽く会釈をして〉 ディクスン郡にはタオルがこれほど汚れてない農家もなん軒ありますがね。

〈回転タオルを回して全部をもう一度見る〉

ヘ夫人 そういうタオルはほんとにすぐ汚れるんですよ。男衆の手はなかなか汚れるからねえ。

郡検事 ほう、同性のよしみ、ですか。ですが、ここのライト夫人とはお隣同士でしたね。おつきあいもあったと思いますが。

ヘ夫人 〈頭を振りながら〉 ここ数年あまり見かけなかったです。この家にも足を踏み入れなかったし——もう一年以上になるねえ。

郡検事 それはまたどうしてです？ 仲が悪かったとでも？

ヘ夫人 そんな、仲は人並だったですよ。農家の女房は忙しいんですよ、検事さん。それに——

郡検事 なんです？

ヘ夫人 〈見回しながら〉 あまり楽しげな様子もなかった家ですよ、ここは。

郡検事 そう、楽しくない。あまり家庭的な女性ではなかったらしい。

ヘ夫人 それは、旦那の方も似たり寄ったりで。

郡検事 折り合いが悪かったとでも？

ヘ夫人 いや、そんなつもりはないけどね。ただ、ここの旦那は、いてくられても家が楽しくなるような人じゃないね。

郡検事 その件はまた後ほどかがいましょう。二階の様子を見ておきたいものですから。

〈上手へ行く、そこから3歩で階段に続く戸口になる〉

保安官 うちの家内なら何をしてても構わないでしょうな。衣類を少々、他にもいく品か差入れするはずになってましたしな。きのうはほんとに慌ててましたからな。

郡検事 ええ、ですが、ピーターズ夫人、差入れるものには目を通していただきたいですな、捜査に役立つことがあるかも知れません。

ピ夫人 判りました、検事さん。

〈女達は階段を登っていく男達の足音に耳を済ます、それから、台所を見回す〉

へ夫人 男衆に台所を嗅ぎまわられて、あれこれ言われるのはいやだねえ。
〈郡検事が散らかした鍋を流し台の下に片付ける〉

ピ夫人 職務でしてただけでしょう。

へ夫人 職務はいいけど。でもね、火をおこしにきた助手がこれをちょっとは使ったかも知れないよ。〈ローラー・タオルを少し引っ張る〉 早く気がつけば良かったんだけど。おおいそぎで出なければならなかったんだから、きちんと片付いてないって言うのはどうかねえ。

ピ夫人 〈部屋の上手奥の小さなテーブルのところへ行き、鍋にかかった布巾をめくってみて〉 パンを仕掛けてあったんだわ。

〈立ち尽くす〉

へ夫人 〈部屋の反対側にある低い棚にあるパン入れの傍らにあるパンに目を据え、ゆっくりとそちらへ歩く〉 入れようとしていたんだよ。〈パンを手にするが、にわかに元に戻す。よく知っている話題に戻る口調で〉 果物についちゃあちょっと残念だね。みんなだめになったのかねえ。〈椅子に乗って見回す〉 いたんでないのがここに少しあるようだよ、ピーターズの奥さん。そう——ほら 〈窓の方へかざしながら〉 これもさくらんぼだ。〈また見回して〉 これだけだね。〈椅子を降りる、瓶を手になっている。流し台に行き、瓶の外を拭く〉 熱い天気につっかく頑張ったのがっかりするだろうね。去年さくらんぼの始末をしたあの午後は忘れられないよ。
〈部屋の真ん中にある大きな台所テーブルに瓶を置く。ため息をつきながら、今にも揺り椅子にかけんばかりになる。腰をおろさないうちに、なんの椅子かに気づき、ゆっくりと見やって、後じさる。手をはなされた椅子が揺れる。〉

ピ夫人 さ、私も表の部屋の押し入れからもってこなくっちゃ。〈下手のドアに行く、が部屋の中を見ただけで、後じさる〉ヘイルさん、一緒にきてくれる？

〈二人が別の部屋に入り、出てくる、ピーターズ夫人がドレスを、後に続くヘイル夫人が靴を一足持っている〉

ピ夫人 まったく寒いわねあっちは。

〈衣服を大きなテーブルにのせ、あわててストーブに歩み寄る〉

ヘ夫人 〈自分のスカートを見つめながら〉 ライトの旦那は締め屋でね。それであの人あんまり人づきあいがなかったんだよ。婦人互助会にも入らなかったしね。役割が果たせないと思ったんだね、自分がみすばらしい気持ちになったんじゃ、楽しめないからさ。結婚前に、聖歌隊にはいった町の女の子の仲間だった頃は、きれいに着飾って元気な娘だった。でも、そりゃあ、おやおや、30年も前になるねえ。あんたが頼まれたのはこれだけかい？

ピ夫人 エプロンが欲しいって言ってたわよ。変ねえ、まったく、牢屋の中じゃあ汚れ仕事もないでしょうに。でも、そうか、いくらかでもいつもの気持ちでいたいね。この茶だなの引出しだって言ってたわ。あ、あった。それから、いつも戸の後ろにかけておくちいさなショールもって言うてた。〈階段に続く戸をあけてのぞく〉 あった、あった。

〈二階に通じる戸を手早く閉める〉

ヘ夫人 〈にわかに彼女に近寄り〉 ピーターズの奥さん。

ピ夫人 なんだい、ヘイルさん。

ヘ夫人 あんた、あのひとがした、と思うかい？

ピ夫人 〈おびえた声で〉 いや、判らないわ。

ヘ夫人 私はね、あの人じゃないと思うんだよ。エプロンとショールを持ってきてって言ったり、果物の瓶詰の心配したりさ。

ピ夫人 〈物を言おうとして、上をちらっと見やる、二階の部屋で足音があったのである。声を低くして〉 うちの人はどうも不利な状況だって言うのよ。検事さんはとても皮肉な人だから、目がさめなかったっていう言い分をからかうだろうけどねえ。

ヘ夫人 でも、首の下に縄を通しててもジョンは目を覚まさないようだよ。

ピ夫人 そう、変ねえ。手口がとても巧妙で、音を立てなかったに違いな

いものねえ。なんでも、その、とても——妙な殺し方だって言う話よ、そんな風だったら。

へ夫人　うちの人もそう言うんだよ。家には銃が一丁あったそうだし。そのところが判らないってね。

ピ夫人　検事さんが途々言ってたけど、動機がないとかよ。腹を立てたとか、なにか急な気持ちの変わりようを思わすものが足りない、って。

へ夫人　〈テーブルの脇に立っていたが〉　どうも腹が立ったのが判るものはなんにも見受けられないねえ。〈テーブルに置いてある布巾に手を置き、立ったままテーブルを見おろす。テーブルは半分はきれいに片付いているが、残りの半分は散らかったままである〉　ここまでは拭いてあるねえ。〈残りも拭こうとするが、振り向いてパン入れに入れてないパンを見やる。布巾を置く。なじみの話題にもどる口調で〉　上の様子はどうだろうねえ。もうちょっと片付けといたのならいいけど。だってさ、のぞき込まれたようだもの。あの人を町の牢に入れといて、その留守に出かけてきてあの人不利になるように家を調べるんだからさ。

ピ夫人　だけど、法は法よ、ヘイルさん。

へ夫人　そうだねえ。〈コートのボタンをはずしながら〉　あんたも少しゆるめるといいよ。出かけるときは気にならないんだけどね。
〈ピーターズ夫人は毛皮の肩掛けを外すと、奥のフックに掛けにいき、立ったままで小さなコーナー・テーブルの下を見ている〉

ピ夫人　あの人キルトを刺していたんだねえ。

〈彼女が大きな裁縫籠を持ってくる。二人で色とりどりの布切れを見やる〉

へ夫人　丸太小屋の模様だよ。きれいだねえ？　キルトにするつもりだったのか、それとも縫い合わせるつもりだったのかねえ。

〈かぶせるように階段を降りる足音がする。保安官がヘイルと郡検事を従えて登場〉

保安官　キルトか縫い合わせかだとさ。

〈男達は笑う。女達は恥入った様子〉

郡検事　〈両手をストーブにかざし揉みながら〉　フランクが上につけた火はたいしたことなかったな。さて、納屋に行って調べることにするか。

〈男達は表に出る〉

へ夫人　〈憤慨して〉　なんにも変なことはないじゃないか、証拠さがしを

待ってる間にあれこれこまごましたことに目を向けたって。〈腰をおろして大きなテーブルの一角を毅然としてかたづけ始める〉 なんにも笑われるようなことじゃないよ。

ピ夫人 〈言い訳がましく〉 大事なことに頭をつかっているのは判るけどね。

〈椅子を引き寄せ、ヘイル夫人がテーブルでしていることに加わる〉

ヘ夫人 〈新しい一角を調べながら〉 ピーターズの奥さん、これを見なよ。ほら、こっちがやりかけてた分だよ、針使いを見てごらんよ。大方はきちんと揃っているけど、ここを見て、ここ。針目がぐちゃぐちゃ。何を縫ってるんだか知らずにいたみたいだよ。〈こう言った後、二人は顔を見合わせ、戸口に目をちらちら向け始める。しばらくしてヘイル夫人が糸目を引っ張り、縫物をばらしてしまう。〉

ピ夫人 おや、なにをしてるの？

ヘ夫人 〈おだやかに〉 揃ってないところをちょっとほどいてるんだよ。〈針に糸をとおしながら〉 不揃いな縫目を見るといらいらしたもんだから。

ピ夫人 〈いらいらして〉 あれこれさわらない方がいいわ。

ヘ夫人 こっちの端を仕上げるだけさ。〈とつぜん手を休め、上半身を傾けながら〉 ねえ、ピーターズの奥さん。

ピ夫人 なんです、ヘイルさん。

ヘ夫人 あの人は何で気をもんでたんだろうね。

ピ夫人 ああ——判らないわねえ。気をもんでたのかどうか。私も疲れてるだけで縫目がひどくなることもあるし。〈ヘイル夫人はなにか言おうとし、ピーターズ夫人を見やり、縫いつづける〉 いろいろ包んどかなくちゃ。あっちが存外早く済ませるかも知れないし。〈エブロンなどを集めながら〉 どこかに紙と紐があるかしらねえ。

ヘ夫人 あそこの戸棚にでも。

ピ夫人 〈戸棚の中を探しながら〉 まあ、こんな所に鳥かごがあるわ。〈かごをかざす〉 あの人鳥を飼ってたのかしら？

ヘ夫人 さあ、どうだったか——わたしあ長いことじゃましたこともなかったしねえ。去年カナリヤを安く売り歩く男がきたことがあったけど、あの人が買ったかどうか、ま、買ったんだろうねえ。以前はなかなか歌が上手だったねえ、あの人も。

ビ夫人 〈周囲をちらちら見回しながら〉 こんな所に鳥なんて考えても妙ねえ。でも、飼ってたにちがいないわ、でなきゃなぜ鳥かごなんかあるかしら。カナリヤはどうしたんだろう。

ヘ夫人 たぶん猫がとっちゃったんだよ。

ビ夫人 いや、あの人は猫は飼ってなかった。ほら、よくある猫ざらい——恐がるのよ。うちの猫があの人のお部屋に入ってねえ、大騒ぎでつれだしてくれてたのまれたことがあったわ。

ヘ夫人 あたしの妹のベッシーもそんな風でね。妙だねえ。

ビ夫人 〈鳥かごを調べながら〉 この戸をみて。こわれてる。蝶つがいがつ引っ張って外されてる。

ヘ夫人 〈調べて〉 乱暴な扱いをしたんだよ、誰か。

ビ夫人 ほんと、そうだわねえ。

〈舞台前方に鳥かごをはこび、テーブルの上におく〉

ヘ夫人 証拠さがしならとっととやってくれないもんかねえ。この家は気味がわるいよ。

ビ夫人 あなたと一緒にきてもらってよかったわよ、ヘイルさん。一人ですわってたらさびしいわ、きつと。

ヘ夫人 ほんとだよねえ。〈縫物をおいて〉 でもね、わたしゃ心のこりがあるんだよ、ピーターズの奥さん。あの人がいるときにたまにやきてやるときゃあよかったってね。〈部屋を見回しながら〉 そう思うんだよ。

ビ夫人 だけどあなただってとても忙しかったでしょう——家の始末もあるし、子供がいるんだから。

ヘ夫人 その気ならできたんだよ。近寄らないようにしてたんだよ、様子がくらいんでねえ——だからこそ来てやった方がよかったんだけどねえ。この——この家にやどうしてもなじめなかったんだよ。窪地にあって道路が見えないからかも知れないねえ。なぜだか、昔からいつも寂しい家だった。たまにゃあミニー・フォスターにも寄ってやるときゃあよかったねえ。今になって判るんだよ——

〈頭を左右に振る〉

ビ夫人 でも、ヘイルさん、自分を責めることはないわ。どうも、よその家のこととなると、なにかが——もちあがってはじめて判るものだから。

ヘ夫人 子供がいないと暇はできるけど——家が寂しくなるんだよね。そ

れにライトの旦那は一日中よそへ出ていて、帰ってきてもいっしょにいてにぎやかだったこともなかった。ジョンを知っていたかね、ピーターズの奥さん。

ピ夫人 知ってるってほどじゃなかった。町で見かけたけど。いい人だとは聞いてたわ。

へ夫人 そうだ——人柄はね。酒はやらねえ、人並に約束は守るようだったし、借金は返したね。だけど、取っ付きの悪い人でねえ、あんた。あいさつするだけでも——〈身震いする〉骨身にしみる風のようなだったよ。〈言いよどむ。目をかごに落として〉小鳥の一羽ぐらい飼いたくなっただろうねえ。でも、鳥はどうしたんだろうねえ。

ピ夫人 判らないわ、弱って死んだんでもなければね。

〈手を伸ばして、籠のこわれた戸を揺する、もう一度くりかえす。女二人はそれを凝視する〉

へ夫人 あんたはこの辺りの育ちじゃあないよね？ 〈ピーターズ夫人は首を振る〉じゃあ、昔のあの人は知らないね？

ピ夫人 きのう連行されたきたときが初めてだから。

へ夫人 あの人は——考えてみると、鳥のようなだったよ、自分の方が——ほんとにかわいくって、だけどこかおずおずしててねえ——じっとしてなくてさ。すっかり——変わっちゃったねえ——あの人。〈沈黙。それからよい考えが浮かび、身の回りの話題にもどれてほっとしたように〉あのさ、ピーターズの奥さん、あんたがキルトを持ってってやったらどうだろ？ ふさいだ気持ちがほぐれるかも知れないから。

ピ夫人 おや、それは名案よね、ヘイルさん。反対もあるはずないし、ね。だったら、なにを持って行こうかしら。布切れは入っているかしら——道具も。

〈二人は裁縫かごをのぞき込む〉

へ夫人 赤がいくらあるね。道具はこの箱にでも入っているだろうさ。〈ときれいな箱を持ち出す〉きれいな箱だねえ。はさみはこの中だろう。〈箱を開ける。突然手を鼻にあてる〉まあ——〈ピ夫人が身をかがめて近づけ、顔を背ける〉このシルクの布切れにはなにか包んであるね。

ピ夫人 ええ、はさみじゃないわ。

へ夫人 〈布を持ち上げながら〉まあ、あんた——これは——
〈ピーターズ夫人がさらに身をかがめる〉

ピ夫人 飼ってた鳥だわ。

へ夫人 〈飛び上がって〉 だけど、あんた——見てみなよ。首！ 首を見なよ。むこう向いたつきりだ。

ピ夫人 だれか——首を——ねじったのね。

〈二人の視線が会う。こみ上げる不安、恐怖の表情。外に足音が聞こえる。ヘイル夫人は箱をキルト用の布地の下にすべりこませ、椅子に座り込む。保安官と郡検事登場。ピーターズ夫人立ち上がる。〉

郡検事 〈真剣なことを終え取るに足らぬからかいを始めたように〉 やあ、みなさん、キルトするところだったんですか、それとも縫い合わせるだけでしたか？

ピ夫人 縫い合わせるつもりだったようですよ。

郡検事 なるほど、確かに興味深い点ですな。〈鳥かごに気づき〉 鳥は逃げてしまったんですかな？

へ夫人 〈キルト用の布切れをもっと箱にかぶせながら〉 どうやら——猫がとったんですよ。

郡検事 〈考えごとをして〉 猫がいますかな？

〈ヘイル夫人は見られないようにすばやくピーターズ夫人をちらっと見やる〉

ピ夫人 どうも、今はいないようですよ。猫は迷信深い動物ですからね。いなくなるんですよ。

郡検事 〈ピーターズ保安官に、話の先を続けて〉 外部から人が入った形跡はまったくない。ここの家のロープだ。もう一度上に行って、つぶさに調べよう。〈二階へ向かう〉 誰か内部の事情に詳しい——
〈ピーターズ夫人腰をおろす。二人の女性はお互いを見ることなく座っている。しかし、なにかをのぞき込み、同時に後じさりをしているかの様である。今や二人の話ぶりは初めての土地を手探りで進むようであり、自分の話におびえながら、話さずにはいられないかのごとくである。〉

へ夫人 鳥を可愛がっていたんだよ。だから、あのきれいな箱にいれて埋めてやろうとしてたんだ。

ピ夫人 〈ささやき声で〉 娘のころ——小猫だったけどね——男の子が斧を取って、私の目の前で——止めに近寄るひまもなく——〈一瞬顔を覆う〉引き止められなかったら、きっと——〈言葉を切り、足音がする上を見上げ、よわよわしげにやっと言う〉 その子におそいかかったと思うわ。

へ夫人 〈まわりをゆっくりと見回して〉 子供がいなくてのはどんなぐあいだろうねえ。〈間〉 そうとも、ライトの旦那なら鳥なんかかわいがないだろうよ——歌を歌うものは。あの人も昔はよく歌ってたものさ。それもライトに殺されちゃったんだよ。

ピ夫人 〈落ちつかなげに身じろぎして〉 誰が鳥を殺したかは判っていないんだから。

へ夫人 私はジョン・ライトなら知ってるよ。

ピ夫人 あの晩この家で恐ろしいことがあったのよ、ヘイルさん。寝ている男を殺したんだから、縄で首を締めて。

へ夫人 ジョンの首にねえ。ジョンを殺したんだねえ。

〈手が伸び、鳥かごにとまる〉

ピ夫人 〈声を高めながら〉 誰がやったのかは判らない。判らないわ。

へ夫人 〈考えを持ち続けて〉 なん年もなん年もなんにもなくやってきて、歌いかけてやれる鳥一羽だけだったら、おっそろしく——静かだろうねえ、鳥が静かにされたらねえ。

ピ夫人 〈含みのある話し方で〉 わたし静けさってものを知ってる。ダコタに所帯を持って、初めての子供が死んだの、二歳にもなってねえ、それから他に子供ができなくて——

へ夫人 〈動き回りながら〉 証拠さがしはそろそろ終わるんだろうかねえ。

ピ夫人 わたし静けさってものを知ってるのよ。〈自分を取り戻して〉 罪を犯したら法の裁きを受けなくちゃいけないのよ、ヘイルさん。

へ夫人 〈受け答えしてる様子はなく〉 見てもらいたかったねえ、ミニー・フォスターが青いリボンのついた白のドレスを着て、聖歌隊席で立ち上がって歌ったのをさあ。〈部屋を見回して〉 ほんとに、たまには来てやってたらねえ。そりゃあ罪だった。罪だったよ。誰が罰をあてるんだろう。

ピ夫人 〈上を見上げながら〉 興奮しちゃあ——いけないわ。

へ夫人 助けが要りようだったと判ってやれたのに。女の——つらさは知ってるんだから。やっぱり、変だよ、あんた。お互い近くに暮らしているくせに、ばらばらだ。みんな同じ目に会ってるのにねえ——種類が違うだけで。〈目をこする。果物の瓶詰に気づき、手を伸ばす〉 私なら果物が駄目になったとは言わないね。大丈夫だと言っておくれな。これを持って行って判らせてやっとくれ。あの人——あの人割れたかどうかとも知らないままにな

つちまうかもしれないからね。

ピ夫人 〈瓶を受け取る。なにか包むものを探す。別の部屋から持ってきた衣類の中からベチコートを取り、ひどく落ち着かない様子で瓶に巻き付ける。もっともらしい声で〉ほんとに、男衆に聞かれなくてよかった。笑われてしまうわ。つまらないことに取り乱して——死んだカナリヤなんて。なんかの、なんかの役に立つみたいにな——笑われてしまうわ！

〈男達が階段を降りてくる音がする〉

へ夫人 〈声をひそめて〉 笑うかも知れない——笑わないかも知れない。

郡検事 いや、ピーターズさん、犯行理由のほかはすっかりわかった。女の陪審員となると、ね。決め手があればいいんだが。なにかこの妙な手口につながる証拠となる、納得できるものが——。

〈女達の視線が一瞬会う。外へ通じる戸口からヘイル登場〉

ヘイル 馬を回したよ。馬小屋は寒かった。

郡検事 私はしばらくここに残る。〈保安官に〉 なにかあったらフランクをよこしてくれたまえ。全部見直してみたい。こんな捜査結果では満足できないんだ。

保安官 家内がが差入れるものを確認しますか。

〈郡検事はテーブルに近づき、エプロンを取り上げ、笑う〉

郡検事 ああ、ご婦人達が選んでくれたものは安全らしい。〈いく品か動かして、箱をかくしている布切れが散らばる。後に下がる〉 いや、奥さんに付添いはいらんよ。だって、保安官の妻は法と一心同体だからね。そんな風に考えたことがありますか、奥さん。

ピ夫人 いや、そんな風には。

保安官 〈クックッと笑いながら〉 法と一心同体、か。〈別の部屋の方へ移動する〉 ジョージ、ちょっとここへ来てもらわないと。窓をちょっと調べなくちゃあならん。

郡検事 〈鼻で笑って〉 ああ、窓か。

保安官 ヘイルさん、すぐに表に回るから。

〈ヘイルは外に出る。保安官は郡検事の後について部屋に入る。それから、ヘイル夫人が、両の手をぎゅっとにぎりあわせて、ピーターズ夫人をじっとみつめながら、立ち上がる。ピーターズ夫人は視線をゆっくりと転じ、ヘイル夫人の視線と会う。ヘイル夫人はピーターズ夫人を制し、ついで、箱が隠

されているところに目配せをする。とつぜんピーターズ夫人がキルトの布切れを散らかし、箱を自分が肩にかけているバッグに入れようとする。箱が大きすぎる。箱を開き、鳥を取り出そうとするが、触れない、取り乱し、どうしようもなく立ち尽くす。別の部屋で、ドアノブの回る音。へ夫人が箱をひったくり、自分のオーバーコートのポケットに入れる。郡検事と保安官登場>

郡検事 〈わざとらしく〉 ヘンリー、少なくともあの人キルトをつくるつもりがないことは判明したな。なんと言いましたかな、ご婦人方。

へ夫人 〈手でポケットに当てて〉 縫い合わせ、って言うんですよ、検事さん。

—幕—

ここに訳出した一幕劇 *Trifles* (1916 初演) とその作者 Susan Glaspell (1882-1948) について一言記しておく。

Susan Glaspell の名はそれほど知られてはいない。知られている場合でも、「アメリカ演劇の父」などと呼ばれたりもするユージーン・オニールの出世のきっかけとなるプロヴィンスタウンでの演劇活動に参加していたとして、夫のジョージ・クラム・クックと共に名前が出てくるくらいであり、アメリカ演劇の研究者でも、一般的には、彼女の作品を読んでないことで責められることはまずない、と言ったところであろう。アメリカ本国でも事情はそれほど違わないようである。*Books in Print* などにも項目は2、3にとどまり、ここに訳出した、話題にされることの多い *Trifles* などと合本にすべく写真復刻版が出たりする程度である。

しかし、最近はやがた言及もわづかだかふえてきた。それは思潮の変化によるようだ。すなわち、フェミニズム運動の高まりの中で読み方が変わり、その主張するように、女性の目で書かれたものがその目で書かれたのではないものと違うなを語っているのか、または、書かれたのではなくとも、その目で読まれたときになにが見えてくるか、ということになってきたのだ。たとえば、Ann C. Hall, “‘A Kind of Alaska’: Women in the Plays of O’Neill, Pinter, and Shepard (1993) において *Trifles* は “now considered one of the finest examples of feminist literature” と評されているように、にわかに重要視されるようになった様子が窺える。

グラスペルにはその他に *The Verge* や *The Outside*, さらに *Inheritors* などの劇作品を始め, かなりの数の短編小説があり, 女性特有のあり方を扱うものとも読める作品がある。するとこれも最近になり, 再評価され, 確立した観のある Kate Chopin などとも思いうかび, 比較も誘われるが, 包括的な論考は別の機会に譲る。

なおテキストは C. W. E. Bigsby, ed., *Plays by Susan Glaspell* (Cambridge, 1987) を使用した。 (1995. 4)